

「東京」で輝け若き才能

2020年の五輪開催地が東京に決定した。7年後、各国から集うトップアスリートを、日の丸を背負った本県出身の選手たちが迎え撃つことだろう。競泳、柔道、バレーボール、ホッケー…。栃木から世界に羽ばたく「東京五輪の主役たち」を紹介する。

(加藤景子、井上裕史)

20年の主役狙う本県勢

競泳

「絶対エース」誕生へ

萩の 萩野 公介 (19)

「東京から公介」。ダルに輝き、日本記録を樹立した萩野公介は、2020年の東京五輪で金メダルを争う。2012年のロンドン五輪で銅メダルを獲得した、マイケル・フェルプスに次ぐ「世界の萩野」に変わる時が来そうだ。



女子ホッケー 今市高

昨夏のロンドン五輪。女子ホッケー日本代表「さくらジャパン」の一員として、今市高OGの阿久津智恵(今市高一理大ラグビー・スミスクライン)、柴田あかね(同)の2選手が世界の強豪に挑んだ。「先輩たちのように、私たちが世界で戦いたい」(MF加藤美樹、3年)。身近な卒業生の活躍は、後輩たちにとって大きな刺激となった。

偉大な背中を追う「さくらのつぼみ」たちは、この夏全国の舞台で躍動した。8月の全国高校総体(インターハイ)で準優勝。MF加藤夏美前主将(3年)は「優勝を逃した悔しさもあるが、自分たちは強くなった」。24年ぶりの女王返り咲きは逃したものの、「お家芸、健在を強く印象づけた」。

2年前、U-16日本代表としてFHEカップ(豪州)

7年後「さくら」満開

を経験したDF井上優主将(2年)は「外国人選手は体格がよく、力が強い。でも、日本人でも小柄な選手を生かした勝負ができる」。世界との戦いへ闘志をみなぎらせる。

3選手は「ホッケーはまだマイナー競技。五輪で勝ち、多くの人にその魅力を伝えたい」と口をそろえる。7年後、東京で、本県が生んだ「さくらの花」の笑顔が満開になった時、3人の願いはきっとかなうはずだ。

1980年の栃木の薬園体に合わせ、71年の男子に続いて72年に創部。インターハイには42年連続出場し優勝1回、準優勝4回。全国高校選抜で優勝2回。加藤尚子、小森皆実ら多くの五輪選手を輩出している。

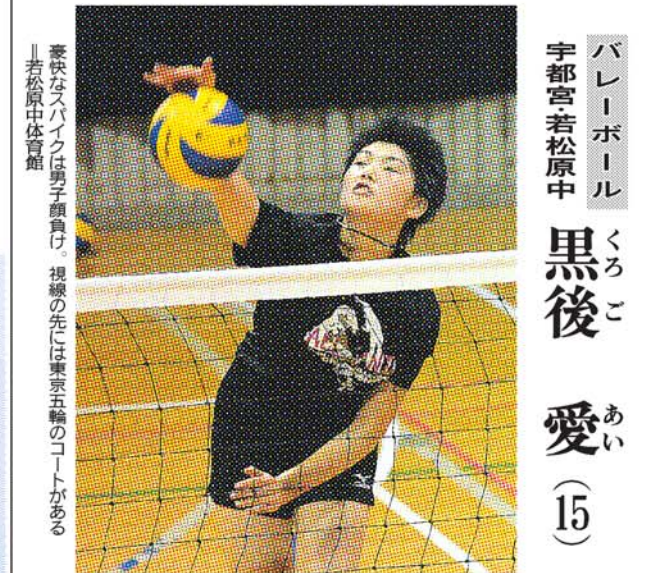


栃木のホープから日本のエース、そして世界の頂点へ。伸び盛りの萩野は、泳ぐ度に新たな驚きと感動を味わっている。8月1日、バルセロナ

小山市出身。作新高から東洋大に進み、北島康介を育てた平井伯昌コーチに師事する。昨年のロンドン五輪400m個人メドレーで銅メダル。

13年の日本選手権で史上最多の5冠に輝き、世界選手権は個人6種目に出場して2種目で銀メダルを獲得した。177cm、70kg。

「東京から公介」。ダルに輝き、日本記録を樹立した萩野公介は、2020年の東京五輪で金メダルを争う。2012年のロンドン五輪で銅メダルを獲得した、マイケル・フェルプスに次ぐ「世界の萩野」に変わる時が来そうだ。



昨年、本県から初となるバレーボール全日本中学選抜のメンバーに選ばれ、韓国遠征に参加。外国人選手との試合を重ね、「世界」を体験した黒後愛(若松原中3年)。2020年の東京五輪開催時は22歳となる。「第一線でバレーを続けるため、ずっと上を目指してきた。高校では全日本選手、その後は五輪。常に1番を狙いたい」と目を輝かせる。

180cm、68kgの恵まれた体格。全身をしながら最高打点295cmから放つ強烈なスパイクの威力は、男子にも引けを取らない。ただ、外国との対戦では「どの選手もブロックが高く、スパイクが落とされることが多かった」と世界の「壁」を実感した。

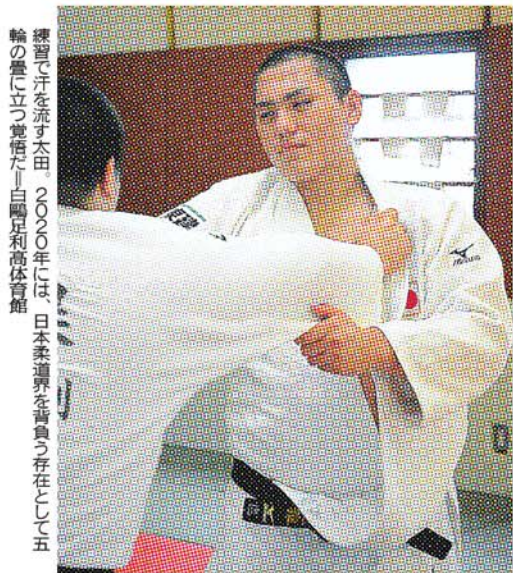
高身長を武器にしたこれまでも違い、自分よりも背の高い相手との戦い方を模索。「オールラウンドプレーヤー」としての道を見いだした。もともとはセンターだが、中学校では部員が少なくあらゆるポジションをこなした。持ち前の器用さでブロックやレシーブの技術力も身につけ、攻守共に穴のない選手に成長した。

東京五輪に向け今後ますます注目を集めそうだが、「人に見られることが好きなので、大舞台の方が頑張れると思う」とこやかに話す。既に大物の風格を漂わせている。

宇都宮市出身。若松原中3年。横川小3年でバレーボールを始め、地元クラブチーム「サンダース」で主将を務めた2010年には、全国スポーツ少年団交流大会で全国3位に入賞。

万能選手への道歩む

柔道 白鷺足利高 太田 彪雅 (15)



日の丸の柔道着姿は貫禄十分だ。白鷺足利高柔道部で、日々技を磨く太田彪雅。3年前、本紙の取材に語った五輪出場という夢が、次第に現実味を帯びてきた。

大食漢の1年生は178cm、108kgという堂々の体格。力強さだけでなく、足技で崩し大技へとつなげるうまさも持ち味だ。達由正監督は「力が強い、しかも動きが速い。食べるのが好きなのは山下泰裕さんと全日本男子の井上康生監督と一緒に」とその素質を高く評価する。

小中学生時代に全国を制した実力者は8月、世界にその名をとどろかせた。米国内で行われた世界カデ(17歳以下)選手権。男子90kg超級に出場し「リーチがあり、組んだらすぐ仕掛けてくる海外の選手は苦手」と言いながら5勝を挙げて頂点。日本柔道の意地をみせつけた。

目標は、太田と同様に内股を得意とした井上監督だ。2000年のシドニー五輪で金メダルを獲得した姿は「格好いいと思った」。幼心に鮮明に残っている。

20年の東京大会は22歳で迎える。「経験を重ねて、日本の重量級を支えられるようになりたい。代表になれば、もちろん勝ちたい」。輝きを増す原石は、母国での五輪に照準を合わせている。

栃木市出身。太平中央小一足利一中一白鷺足利高。小学2年から岩舟柔道会で競技を始め、全国小学生学年別、全国中学大会などで栄冠。今年の世界カデ選手権優勝。10月には国体団体戦に出場予定。

日本の重量級支える



2020 TOKYO OLYMPIC